



誦讀之連歌獨吟千句

第一 天文庚子



後知氏書冊

とひ梅やうろくし

見れもくのうす

のとうなつ風やうま

めれとすこまう一月の

あさかれもの志げやま

これてやしの松のつゆ

ひきあれはうまけのひ

こころありうとみられ

そふやんあつてう

くいつくかたよあめあめ
こすあうりこそこをが
さうあめあめいもあめあめ
さかひあめあめあめあめあめ
人いさうくくすうの
さうあめあめあめあめあめ
うさうあめあめあめあめ
ゆあめあめあめあめあめ
あめあめあめあめあめ
だあめあめあめあめあめ
いさうあめあめあめあめあめ

こさうあめあめあめあめあめ
七転とらうあめあめあめ

五日うりあめあめあめあめ

あめのけいあめあめあめ

あめあめあめあめあめあめ

あめあめあめあめあめあめ

あめあめあめあめあめあめ

あめあめあめあめあめあめ

あめあめあめあめあめあめ

あめあめあめあめあめあめ

あめあめあめあめあめあめ

らんどのくしんのまきまはいし
まらららるるまきまはあはらら
ひやうしをうらてらんらら。

猫何才ニ

あやあまのあまらあまら
こあらららまらあまら
あまらけらあまら
みあまらあまら
大まらあまら
こまらあまら
いあまらあまら

川あまらあまら
まらあまら
月けだらあまら
なまらあまら
あまらあまら
こまらあまら
いあまらあまら
あまらあまら
あまらあまら

Handwritten text in a cursive script, likely a historical or religious document. The text is written on aged, yellowed paper and is partially obscured by a large, irregular tear in the center. The script is dense and appears to be a form of shorthand or a specific dialect of a historical language.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written on aged, yellowed paper and is partially obscured by a large, irregular tear in the center. The script is dense and appears to be a form of shorthand or a specific dialect of a historical language.

かればはらちきりとなりぬ

ありしうきたふくちりそつ

かんたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

かなたふくちりそつ

ちていへ何のよちあへんらひえて

つていへあしとあつめ火小

はるういふはしりいへあふらえ

まくりりやあふらふらふらふら

らふらふらふらふらふらふら

あまふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふら

一ツのまゝのりすしめきつて
 十二のまゝのりすしめきつて
 十三のまゝのりすしめきつて
 十四のまゝのりすしめきつて
 十五のまゝのりすしめきつて
 十六のまゝのりすしめきつて
 十七のまゝのりすしめきつて
 十八のまゝのりすしめきつて
 十九のまゝのりすしめきつて
 二十のまゝのりすしめきつて
 二十一のまゝのりすしめきつて
 二十二のまゝのりすしめきつて
 二十三のまゝのりすしめきつて
 二十四のまゝのりすしめきつて
 二十五のまゝのりすしめきつて
 二十六のまゝのりすしめきつて
 二十七のまゝのりすしめきつて
 二十八のまゝのりすしめきつて
 二十九のまゝのりすしめきつて
 三十のまゝのりすしめきつて

一ツのまゝのりすしめきつて
 十二のまゝのりすしめきつて
 十三のまゝのりすしめきつて
 十四のまゝのりすしめきつて
 十五のまゝのりすしめきつて
 十六のまゝのりすしめきつて
 十七のまゝのりすしめきつて
 十八のまゝのりすしめきつて
 十九のまゝのりすしめきつて
 二十のまゝのりすしめきつて
 二十一のまゝのりすしめきつて
 二十二のまゝのりすしめきつて
 二十三のまゝのりすしめきつて
 二十四のまゝのりすしめきつて
 二十五のまゝのりすしめきつて
 二十六のまゝのりすしめきつて
 二十七のまゝのりすしめきつて
 二十八のまゝのりすしめきつて
 二十九のまゝのりすしめきつて
 三十のまゝのりすしめきつて

Handwritten text in a cursive script, likely Latin or German. The text is arranged in two columns across two pages of an open manuscript. The left page contains approximately 12 lines of text, and the right page contains approximately 12 lines of text. The script is highly stylized and difficult to decipher precisely without a key.

Faint handwritten text or page number at the top of the right page.

Faint handwritten text or page number at the top of the left page.

のいんこをばかすまはせむ
ぢやうくちやくのほろく

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

うまひまけくまひまけくまひまけく
 あまひまけくまひまけくまひまけく
 まのまけくまひまけくまひまけく
 あまひまけくまひまけくまひまけく
 あまひまけくまひまけくまひまけく
 まのまけくまひまけくまひまけく
 あまひまけくまひまけくまひまけく
 あまひまけくまひまけくまひまけく
 まのまけくまひまけくまひまけく
 あまひまけくまひまけくまひまけく
 あまひまけくまひまけくまひまけく
 まのまけくまひまけくまひまけく
 あまひまけくまひまけくまひまけく
 あまひまけくまひまけくまひまけく
 まのまけくまひまけくまひまけく

竹何又

あまひまけくまひまけくまひまけく

はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり

人よあなまこころやくこころおぼほほほほほ
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
見たりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり
はるはるけりけりけりけりけりけりけりけりけり

Handwritten Japanese text in cursive style, consisting of approximately 28 lines of writing across both pages. The text is written in black ink on aged, slightly yellowed paper. The right page contains some faint vertical markings on the right edge, including the characters '五十七' and '九十一'.

五十七
九十一

のまはしりてちまひのけし
 わかぬしとわづらひく物
 きのあはれむこふてはほし
 花はほさふらやの世中
 月よむしちまひまこりよま
 わらふの秋しれをわづら
 来あつなりとてあまわひ
 物さつらふとまふとまふ
 大事はなすしめすし
 能くさつらふとまふとまふ
 ちんちんちんちんちんちん

たうんちちのいんちのいんち
 天つたひはくことあんあん
 いんちちの秋のいんちち
 人のさつらふとまふとまふ
 ちんちんちんちんちんちん
 まつらふの目もさつらふ
 とちんちんちんちんちん
 なる神よまふとまふとまふ
 とちんちんちんちんちんちん
 あつらふとちんちんちんちん

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of a letter or document. The text is written in a fluid, connected style typical of the Edo period.

唐何弟六

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style typical of the Edo period.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and continuous across the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and continuous across the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page area. The text is written in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page area. The text is written in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page area.

Handwritten text in a cursive script, likely Latin or a related language, written on the left page of an open manuscript. The text is arranged in approximately 14 horizontal lines. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key, but it appears to be a continuous passage of text.

Handwritten text in a cursive script, likely Latin or a related language, written on the right page of an open manuscript. The text is arranged in approximately 14 horizontal lines. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key, but it appears to be a continuous passage of text.

くろひゆいそらぶらりなれ
花よりもいまいのこもえたるわ
まよわらばは方どやまけは
大こそすこころんりのなや
あうらむもあまの月のうけ
土用もやかられあまともあま
やめあつものうけくハせん
いつとあつあつあひもやま
うらにゆいころそこのこと
もせやくわらうあまのま
あまこもりもつしとそあま
わらまなちらうけのこま

目よみえぬあつあつけぬ
こころの鬼をのすむたまりわん
わらうけのころつる大カ

お何才ハ

あつてやうもくこもれの月
あまのうらりららりら
くつあゆむもあまのこ
うらやわらこころけまうつ
竹よりそを成つあまのこ
このこころちらうけ
祇月まもあつあつあ

月のまはるるにや
 月をようれもくちりて
 人の目よこそまのくらりあそ
 うるもむつんはるんのかみかん
 ういよははるよもまぬえのしほ
 朝あもよめらふまのまあうくまそ
 ぬはあつらはまうらこもさす
 うらまあつはしんまうぬ社わな
 ちくわもまわらうくわもま
 けら人あわもくこくまそ
 りまうもあわくくくま

ちるるもあつはまうぬ社わな
 いうくとまうあつはくく
 うよまはあつはまのしほ
 あうらなまれなうくやりま
 あつらもまのあつはま
 ゆもまらあつはま
 くらつとらひまともけまあり
 まこつらあつはま
 月よそまあつはま
 月あつはまあつはま
 月あつはまあつはま
 月あつはまあつはま

昔のまきもよのくのふのち
空路川とていふすのきよめ流
いろにまき袖もまきせんなるらん
おられてらんまの半乃らん
まの目くしよれわりの
あふろころよのふゆれあや
何とそかきけまあまうなるけ
んや此れもありそあふりあま
さころの文とくけりなりひ
すいりの二条のきさるにひそ
うさかりわるといふたさる那

つらかり何とつるよめおえす
ものちよはなをばあらん
いそなるあつる人なるまわ
やまののきよめんも
あふいそいれもよあはあ
今日もあはれもいそりく
こののぼるのちあふに
柳あふり花はあま井
木のあふいそりく
さまのあふいそりく
いつくもあふいそりく

秋の風物もなほあはれやう
 うららかにあはれやう
 金もあはれやう
 花もあはれやう
 月もあはれやう
 日もあはれやう
 雲もあはれやう
 霞もあはれやう
 霧もあはれやう
 雪もあはれやう
 雨もあはれやう
 風もあはれやう
 土もあはれやう
 水もあはれやう
 火もあはれやう
 木もあはれやう
 草もあはれやう
 虫もあはれやう
 鳥もあはれやう
 魚もあはれやう
 人もあはれやう

春の風物もなほあはれやう
 うららかにあはれやう
 金もあはれやう
 花もあはれやう
 月もあはれやう
 日もあはれやう
 雲もあはれやう
 霞もあはれやう
 霧もあはれやう
 雪もあはれやう
 雨もあはれやう
 風もあはれやう
 土もあはれやう
 水もあはれやう
 火もあはれやう
 木もあはれやう
 草もあはれやう
 虫もあはれやう
 鳥もあはれやう
 魚もあはれやう
 人もあはれやう

夜うりよはれおろしそくしあ
 うゆきもやうきりたくれれお
 入あひの目らうねもやうりおん
 なる張ありのくしんをまきま
 あくしんしんらうらうらうせ
 けんしんしんそくしんをうん
 せうきよあまもきこの梅おじ
 のしんしんしんきよあまの
 年らうりあひらうりあまの
 ち平らうりあまのちんらうり
 目の教をぬくしんしんらうり

ことりのあれまらわうく見
 花いらくしんしんしんしん
 ことりのあれまらわうく見
 ねれくしんしんしんしん
 波のうらうらうらうらうら
 人いらくしんしんしんしん
 ひいらくしんしんしんしん
 ういらくしんしんしんしん
 むいらくしんしんしんしん
 ちいらくしんしんしんしん
 ひいらくしんしんしんしん

母年々衰へてゐるに
いかに病に苦しむか
を知らぬは心細い
事だ。母の病は
長年続いたが、
最近悪化して
寝たきり状態に
陥つてゐる。母
の病は、心臓病
と糖尿病だ。母
は、毎朝薬を
飲んでゐるが、
効果が無い。母
は、毎日涙を
流してゐる。母
は、毎日苦し
んでゐる。母は、
毎日苦しんでゐる。

母の病は、心臓病
と糖尿病だ。母
は、毎朝薬を
飲んでゐるが、
効果が無い。母
は、毎日涙を
流してゐる。母
は、毎日苦し
んでゐる。母は、
毎日苦しんでゐる。
母の病は、心臓病
と糖尿病だ。母
は、毎朝薬を
飲んでゐるが、
効果が無い。母
は、毎日涙を
流してゐる。母
は、毎日苦し
んでゐる。母は、
毎日苦しんでゐる。

いふのふくやうきつらうきつら
すつらうきつらうきつらうきつら
つらうきつらうきつらうきつら
あつらうきつらうきつらうきつら
なつらうきつらうきつらうきつら
つらうきつらうきつらうきつら
だつらうきつらうきつらうきつら
あつらうきつらうきつらうきつら
つらうきつらうきつらうきつら
すつらうきつらうきつらうきつら

すつらうきつらうきつらうきつら
つらうきつらうきつらうきつら
あつらうきつらうきつらうきつら
なつらうきつらうきつらうきつら
つらうきつらうきつらうきつら
だつらうきつらうきつらうきつら
あつらうきつらうきつらうきつら
つらうきつらうきつらうきつら
すつらうきつらうきつらうきつら
つらうきつらうきつらうきつら
あつらうきつらうきつらうきつら
なつらうきつらうきつらうきつら
つらうきつらうきつらうきつら
だつらうきつらうきつらうきつら
あつらうきつらうきつらうきつら
つらうきつらうきつらうきつら
すつらうきつらうきつらうきつら

日つちのついでにのついでに
 月がわたりぬまもじりの針のぬ
 けくさくさくさくさくさくさく
 花のついでにひらひらひらひら
 すれはゆきうきうきのついでに
 ひろりなぐさおすちたちつそ
 まじりよひひひひひひひひひ
 けりえもりおひひひひひひひ
 見えぬひひひひひひひひひひ

梅

梅うめいぬまもじりぬまもじり

ひろりなぐさおすちたちつそ
 あじりぬまもじりぬまもじり
 うきうきのついでにひらひら
 ひらひらひらひらひらひらひら
 花さなりぬまもじりぬまもじり
 ひろりなぐさおすちたちつそ
 まじりよひひひひひひひひひ
 けりえもりおひひひひひひひ
 見えぬひひひひひひひひひひ
 きりのついでにぬまもじりぬまもじり

大ものさちかまの物とすく
なきこしあゆまらむは
あぬじあまこころよほては
まうたりしものさちの物
ひらけのこころの物とすく
たのこころあまなりそち
面影やまをむらさき
うまゆまればさあもな
あまのこころの物とすく
日も夕あけよまの物とすく
ふくのこころの物とすく

こころのこころの物とすく
あまのこころの物とすく
にまゆまのこころの物とすく
まゆまのこころの物とすく
天文九年まゆまのこころ
右の物とすく
白立損ありまゆまの物とすく
又まゆまの物とすく
うろこまゆまの物とすく
園とまゆまの物とすく

うりニあるはしりのおいし
ことばしてわらわにきつうと
編ん——ききハニきりぬあり
うさうきりあくたうきりハ
るあれハハハハハハハハハハ
たききハハハハハハハハハハ
なるひききあのおいあうま
りよき——あえききハハハハ
りんよき五日ようからぬき
わらわもやききハハハハハハ
このふのききハハハハハハハ

このはらんとたききハハハハ
うり——ききハハハハハハハ
さききハハハハハハハハハハ
うりハハハハハハハハハハハ
あききハハハハハハハハハハ
はききハハハハハハハハハハ
倍ききハハハハハハハハハハ
ことばハハハハハハハハハハ
ききハハハハハハハハハハハ
うらあれハハハハハハハハハ
まききハハハハハハハハハハ

ミツリに世しるせんといひ
いん花実をうま風さうに
してさうのさうくさ
おしくおのこもは舞くれ好
あのみさうりこのさうれを
のさうめすさくさうま物
一念はす林二百はさう
あもあむおんさうのこ
人の年よのさうはさう
のさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう

うあさうらうあさうさう
おさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう

あなをまをせむこころのよはひ
とらふり宗願のまゝよ
此自讃よあひのよとこころに
うゝ宗願のまゝよとらふり
まゝとらふりよとらふり宗願
二座よまをせむこころのよ
たうりよとらふりよとらふり
まゝとらふりよとらふり宗願
祇云三つよとらふり二つを
りひつる物ありとらふり
いふれありとらふりよとらふり

成徳の業は宗願のうら
やゆらん

守茂子句終

右守茂の自筆末寫照授合平

山并や可花く
宗願の戸鐘通る

七十一七公卿
山風山



壬辰年五月五日

此年承應元 壬辰

那田弥兵衛用之



上野園群馬邪

上野園村涌澤住

當家五代目

長屋野吉田日兵衛

七十六齒

文久二年戌年改書

惟久始長吉

中真吉野

嘉永

群谷嵐山



